避難所運営講座
～中学生にできること～

令和４年12月７日㈬に御堂中学校の１年生を対象に、講師を招き避難所運営講座を開催しました。避難所運営講座とは、避難所運営に関する基本的な知識や課題等に関する講義と、避難所運営ゲーム（ＨＵＧ）を実施し、地域防災に積極的に関わろうとする態度を育み、防災リーダーとして活躍できる人材を育成する講座です。講師の指導の下、５～６人の班で役割を決め避難所運営ゲームを通し、災害に対する意識を高めました。

＊避難所運営ゲーム（ＨＵＧ）＊
避難所運営をみんなで考えるためのアプローチとして静岡県が開発したものです。避難者それぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対処していくかを疑似体験するゲームです。

生徒の体験談を紹介します。

僕は二つの事を学びました。一つ目は避難所のスペースの活用です。避難所はたくさんの人が身の安全を求めてやってくる場所なので、スペースをどうやって分けるかが難しかったです。もう一つは人々への配慮です。外国の方や知的障がいのある人は、環境を整えることが大切だと知り、自分も災害が起きた時は優しく接しコミュニケーションを取りたいです。（大野瑠久さん）

私はこの講座を通し、避難してきた人たちへの指示の仕方、トイレや炊き出し等を学びました。避難してきた人の不安な気持ちを考えて、地区ごとに分けたり、ペットや小さな子どもがいる家庭は体育館以外の場所にするなど、様々な工夫の仕方があることを知ることができました。また、避難所は簡単に作れるものではなく、換気や水が流せるかなど細かい部分まで考える大変さを知りました。（高井美空さん）

講座を受けて、避難所での過ごし方を学びました。避難所ではパニックになりやすいので、先に避難したときのことを考えておくと、落ち着いて行動できると教えてもらいました。また、自分だけでなく、家族と共有することで、スムーズに避難できると思うので、家族と話し合おうと思いました。（荒井悠大さん）

避難者は不安な気持ちやストレスを抱えてしまうので、避難所のどこに避難してもらうかを考えるときに、なるべく多くの人が安心して避難所生活を送ることを結構悩んだ。世の中には色々な考え方があって、避難した全員が思い通りの生活を避難所で送ることは難しいから、「なるべく」と考えた方が、災害が来た時には速く対応できるかもしれないと思った。（井上真里さん）

あきる野市総合防災訓練に参加

令和４年11月20日（日）に増戸小学校と増戸中学校の児童生徒があきる野市総合防災訓練に参加しました。校庭と体育館を使い、様々な訓練を行いました。

参加した児童生徒は、消火訓練や応急救護訓練等を行いました。訓練を通し、防災への意識を高めていきました。

アーティスト・イン・レジデンス事業
寄贈作品が決定しました！

令和４年度アーティスト・イン・レジデンス事業の寄贈作品が決定しました。９月１日から11月30日までの３か月の間、３人のアーティストがアートスタジオ五日市に滞在しながら作品を制作しました。

その作品の中からアートスタジオ五日市運営委員会の選定により、作品９点が市に寄贈されました。これらの作品は、今後、市内で開催する展示会で展示する予定です。寄贈作品の一部を作者のコメントとともに紹介します。

（写真左から）
下村栞由さん、松元悠さん、張華さん

張華さん（中国出身）
「Through The Window」

アートスタジオ五日市の２階の窓から見える景色を描いています。作品をよく見ると、戸倉周辺に姿を見せた動物たち（サル、クマ、イノシシ、フクロウなど）も登場しています。

人間にとって野生動物は畑を荒らす危険なイメージを持つこともありますが、人間も動物も自然の一部であると考え制作しました。

松元　悠さん
「無知なれど放つ声（五日市）」

滞在して５日目、五日市憲法草案のＷｅｂ記事を発見しました。後日、深沢家屋敷跡と集団討議が行われていたとされる開光院を訪れました。五日市郷土館で資料を拝見した後、五日市憲法草案に関わる本を図書館で何冊か借り、調べていく中で開光院での議論の一幕に心を打たれました。

自らをフィルターとし、国民が声を絞り出し、憲法というものが作られるならば、私の声はどこにあるのでしょう。弱くても、わからなくても良いから自らの立ち位置を指し示し、声を放つことから始めてみようと思います。

下村　栞由さん「食」

秋川の伝統的なサクリ漁を見学した後、漁で捕れた鮎をいただきました。スタジオに帰ってすぐに調理をしようとまな板の上に置いた鮎が象徴的で思わず写真を撮りました。

レジデンス期間中は和紙作りの活動に参加し、軍道紙を扱っているふるさと工房を訪れました。紙の一枚一枚に特徴があり、紙が大切に扱われていると感じました。思い返すと、この３か月は和紙と向き合った３か月でもありました。そのため、この作品は、あきる野市の紙である軍道紙に秋川で捕れた鮎の思い出を刷りました。